

平成 28 年度

2016 語り部交流会 in あきた

農村における利水と治水の知恵や歴史に学ぶ

【実施報告書】



平成 29 年 1 月 19 日 (木)
北 秋 田 市 交 流 セ ン タ ー

プログラム

- | | | |
|---|---|-------------|
| 1 | あいさつ | 13:00～13:10 |
| | 秋田県土地改良事業団体連合会大館・北秋田支部長 畠山 清俊 | |
| 2 | 基調講演 | 13:10～14:00 |
| | ブナ帯文化のふるさと ～水の郷 in 北秋田～
あきた森づくり活動サポートセンター所長 菅原 徳蔵 | |
| 3 | 実践報告 | 14:00～14:40 |
| | 地域と学校で共に育んだ水源林
元竜森小学校PTA会長 清水 修智
おさるべ川の子どもたち
七日市公民館長 佐藤 和博
鷹巣三堰の歴史とその継承
北秋田市土地改良区事務局長 山内 幸雄 | |
| | (休 憩) | 14:40～14:50 |
| 4 | 語りフォーラム | 14:50～15:50 |
| | 農村における利水と治水の知恵や歴史に学ぶ
コーディネーター：平元 美沙緒（まちづくりファシリテーター）
パネリスト：清水 修智
：佐藤 和博
：山内 幸雄
オブザーバー：瀧川 拓哉（県農林水産部次長） | |

主 催：秋田県土地改良事業団体連合会大館・北秋田支部
秋田県北秋田地域振興局（農林部）
後 援：北秋田市
秋田県土地改良事業団体連合会
東北農政局西奥羽土地改良調査管理事務所

2016 語り部交流会 in あきた

平成 29 年 1 月 19 日（木）、北秋田市において「2016 語り部交流会 in あきた」を開催したところ、全県の土地改良区や多面的機能支払の活動組織の関係者、国、県、市町村の土地改良関係職員及び一般の方など約 260 名の参加となりました。

「語り部交流会」は、本県において平成 23 年度から全国に先駆けて開催しているもので、農地や疏水をはじめとした農村に関わる歴史や文化などを、様々な視点からとらえ語り伝えることで、先人の思いや昔から受け継がれてきた農村に宿る精神（こころ）を再確認し、これを地域活力の向上や地域振興などにつなげていこうというものです。



〔コンセプト〕

北秋田地域には、厳しい地形条件にも関わらず河川から農業用水を引き、農地を拓き、農業を安定させ、地域を発展させてきた、先人の知恵と技術の足跡が数多く残されています。

また、そのような「利水」の歴史とともに、山林の貯水力を高めながら豪雨や洪水時には農地と集落を守る水源林の保全活動といった農山村地域の多面的機能を持続的に発揮させるための「治水」の取組も、長い間地域の共同作業として受け継がれてきました。

今回の語り部交流会では、このような利水と治水を車の両輪として継承してきた農村の知恵や歴史について見つめ直し、現在に置きかえてみることで、今様々な課題に直面している農村の地域防災機能の維持や地域振興に結び付けていけないかを考えてみることにしました。

基調講演

あきた森づくりサポートセンター所長の菅原徳蔵氏が、北秋田の飢饉の歴史やそれを改善するために尽力した長崎七左衛門の紹介、縄文文化を育んだブナの森、里地里山の保全について、「ブナ帯文化のふるさと ～水の郷 in 北秋田」と題し講演を行いました。



〔要旨〕

○北秋田市は、1753年から三年連続で水不足や洪水、病虫害により大凶作になるなど飢饉が頻繁に発生していた。その状況を打開するべく、長崎七左衛門は安定的に用水を供給するため、断崖絶壁に水路トンネル、大留堰堤を築造した。堅い岩盤を掘り抜くために活用されたのが、当時最先端の鉱山技術である。

長崎七左衛門は数多くの書籍を残したが、その中の「長崎農書」に最も早く注目したのは、秋田県農業の神様・石川理紀之介である。長崎農書は、貧農救済に一生をささげた明治期の老農たちに紹介され、継承されている。

○菅江真澄は、森吉山麓周辺に8回も訪問するほどブナ帯地域の自然、暮らしと文化を愛した。阿仁にも訪れ、マタギ言葉にアイヌ語が多いことも発見している。マタギは縄文の末裔であり、縄文遺跡群は、北緯40度以北のブナ帯地域に集中している。ブナの森の恵みが縄文文化を育んでいる。



実践報告

実践報告では、元竜森小学校PTA会長 清水修智氏、七日市公民館長 佐藤和博氏、北秋田市土地改良区事務局長 山内幸雄氏の3名に、ご自身が取り組まれてきた活動について紹介していただきました。



〔①清水氏要旨〕

学校林の活動は、林野庁からの要請により、各地方自治体で学校林設置条例を制定するなどして、学校、地域が一体となり植林活動を行っている。七日市地域でも昭和29年から植林活動を行い、昭和33年から学校植林を実施するべく、子どもたちに杉苗の植え方等を指導した。立木を伐採した後の丸太や枝をかき集める地拵えの作業は、一番の重労働で大変だが、子どもたちが斜面の下で旗を振って応援するなど、地域一体となって作業に励んでいた。学校林の活動は、昭和34年に秋田県大会で優等賞を受賞し、昭和37年には全国コンクールで準特選を受賞するまでとなった。平成5年には内閣総理大臣賞、ノースロップ賞を受賞し名実ともに日本一に輝いた。

昭和34年に植林した阿仁の沢の国有林は100haほどの沢で、昭和29年まで皆伐されていたため、昭和31年に発生した水害では治水機能がなく、沢からの鉄砲水で集落への道路が寸断され、子どもたちが家に帰れないほどの被害となった。しかし、昭和50年に発生した水害では、植樹した樹木の生育が進み、大きな被害には至らなかった。

植林活動から60年近く経った今では、国有林1,500haが生活環境保安林に設定、私有林でも230haが水源涵養保安林に設定されている。これらは、地域住民と学校職員、生徒、そして卒業生等の60年の汗の結晶である。





〔②佐藤氏要旨〕

北秋田市七日市地域は、長岐家が歴代の当主を務めている。その中でも七代目長崎七左衛門は、長岐家文書とよばれる多くの書物を残し、書物は秋田県公文書館に所蔵されている。十一代目の長岐貞治は、地域の将来を担う人材を育成するために、後の鷹巣農林高校となる郡立農林学校の創立に尽力した。新築落成式には石川理紀之介翁も参加している。五代目の長岐甚之丞は、私財を投じ、3年がかりで絶壁を切り抜き、岩堰とよばれる用水路を完成させた。たがねとのみだけで絶壁を削った痕は、今でも鮮明に残っており、見ると当時の人たちの思いや息づかいまでが感じられる。

岩堰を巡る体験活動は、小学校の教育課程に組み込まれており、地域の方が先生となり子どもたちに岩堰の歴史を教えている。他にも、おさるべ自然の会や地域の人たちが協力して実施しているおさるべ川探検隊では、仲間と共に泳いだり水生生物と触れ合ったりして、ふるさとの川で思う存分楽しむ活動を行っている。その活動は道具もなにもいらず、ゲームにも負けていない。

葛黒の火まつりは、3年ほど前に葛黒の自治会とおさるべ元氣くらぶが、12年ほど途絶えていた行事を復活するので、ぜひ子どもたちの力を貸してほしいと学校に要請があり、復活に協力することとなった。わらを巻いた大木に火がつけられると「おーいかまくらのごんごろー」と叫び続け、無病息災と五穀豊穡を祈る。「おーいかまくらのごんごろー」という叫びとわら集めが子どもたちの仕事で、子どもたちは地域の方々から褒められ、喜ばれ、地域の力になったんだという達成感、充実感を感じたようであった。





〔③山内氏要旨〕

鷹巣三堰とは、1661～1681年に造られた、米代川を取水源とする太田堰、坊沢堰、鷹巣堰を統合した呼び名である。

太田堰は1662年に造成されたが、堰は仮設的なものであり、度重なる洪水で幾度となく修復を行っていた。その状況を打開するべく再興を計った人物が渡部斧松であり、米代川からの取水は困難と判断したため、早口川からの取水とし新たに70haへのかんがいが可能とした。

しかし、三堰はどの堰も仮設的なもので、年月の経過と共に維持管理は多大な負担となっていたため、昭和24年に三堰を統合する計画を立て、昭和41年3月に合同取水施設（揚水機場）を完成させた。その後、昭和53年に、河床低下と好天続きにより揚水量が減り、無理な運転を続けたため、ポンプの1号機が運転不能、2号機も揚水量が激減してしまった。そのため昭和54年に対策を検討し、昭和55年にかんがい排水事業に着工、昭和61年の完成となった。鷹巣三堰は、先人たちの「利水と治水」にかけた思いを受け継ぐ貴重な土地改良施設であり、後世に伝えるべくこれからも管理していきたい。

鷹巣三堰の継承として、太田堰の工事を承認した当時の御奉行が亡くなったとき、その霊を奉り偉業を後世に伝えたいという思いから太田堰神祭を開いた。現在も御奉行の命日である5月2日に毎年行っている。他にも地元の小学生への出前授業や、田植え、稲刈り体験を通じて、田んぼに必要な水は、土地改良区で管理し供給しているということを伝えている。現在の土地改良施設は先人たちがその時々知恵や労力、費用を掛けて築いてきた証であり、今ある施設の重要性を再認識し後世に伝えていくためにも、土地改良区は適正な維持管理に努めていきたい。



語りフォーラム

語りフォーラムでは、「農村における利水と治水の知恵や歴史に学ぶ」をテーマとし、まちづくりファシリテーターの平元美沙緒氏をコーディネーターに、実践報告をしていただいた清水氏、佐藤氏、山内氏がパネラーに、県農林水産部次長の瀧川氏がオブザーバーとなり、様々な立場や観点からの意見を交わしました。



- ・コーディネーター 平元 美沙緒氏
- ・パネラー 清水 修智氏、佐藤 和博氏、山内 幸雄氏
- ・オブザーバー 瀧川 拓哉氏

【3名の実践報告を聞いた感想について】

(瀧川氏)

副題である農村における利水と治水の知恵や歴史に学ぶに関して、4名の方の報告に一貫性があり、すべての報告が勉強になった。石川理紀之介が残した「樹木は祖先より借りて子孫に返すものと知れ」という言葉があるが、その言葉をまさに実践しているのは清水氏ではないか。遠い先人の知恵、近い先輩の実践というものの話を同時に伺うことができた。

七日市の偉人として、長崎七左衛門が紹介され、七左衛門が残した言葉に「年寄りはずつしくとも若き人 昔のこと語るをば聞け」とあるが、世代を超え先代の知恵や知識をつないでいく、共有していくことの重要性を感じた。

【テーマ①】

今までの取組、活動の中で最も苦労したこと、思いも寄らなかった成果や変化について

（清水氏）

地域全体で支援してきた学校林の植林活動が、思いも寄らず保安林設定につながり、地域の治水や利水にとって大きな財産となった。

（佐藤氏）

葛黒の火まつりは、葛黒の自治会とおさるべ元気くらぶからの依頼によって復活したが、子どもたちも長い間途絶えていた行事が復活するとは思っていなかったようだ。しかし、行事が復活し、子どもたちが実際に行事に貢献し、わたしたちにもできるんだと気づかせることができたということが成果となった。

（山内氏）

改良区としての活動は、限られた範囲の中で行っており、他の改良区では施設めぐりなどの大きなイベントを実施している中、私たちが苦労しているとは言いがたい。

多面的機能支払の活動の中で、学校教育との連携ができ、田植えや稲刈りといった活動を実施している。子どもたちの交流を深める事業を継続してできるということがいい面に感じる。

（瀧川氏）

今から3年前に国土強靱化基本法が成立した。保安林、河川、ダム、堤防、農業水利施設の整備というハード面のほか、地域共同体の維持活性化といったソフト面も法律に書き込まれており、地域のネットワークの強化が防災・減災、しなやかな社会づくりにつながる。それぞれ報告していただいた地域の活動・行事を、世代を超えて受け継いでいくのが地域防災機能の維持に結びついていく。

【活動紹介】

「地域で楽しく暮らすヒントひろば IN ほろわ」

（平元氏）

この活動は、若手農家や学生と一緒に企画しているイベントで、地域の中で楽しく自分らしく暮らしていくためのヒントを集め、それぞれの地域で楽しく生活していこうというメッセージが込められたトークイベントである。地元の人が地域外の若手農家や学生と一緒に何かを考えていく場をつくることで、これまでの価値観と、新しい価値観の融合ができる場というのを意識している。地域で楽しく暮らしている人をゲストとして招き講演してもらったり、世代に関係なく自由に話し合うことで意識を変えるヒントを見つけてほしいと思っている。

参加した学生に言われたことで印象的だったのは、「もう少しですよ」と声を掛けられたことだ。「農村やそれを支える水に興味を持っている学生がとても増えている。もう少しで、若い人の中でもそれが一般的な価値観になり、農村集落を担う人が増えてくるのではないか。」

古いものと新しいものが融合するというのは、世代間の融合だけではなく、地域内のものと地域外のものの融合というもある。伝統の中に新しい価値を見出せる雰囲気作りができ、楽しい場の創出につながればいいなと思い活動をしている。歴史の継承と聞くと難しいが、一緒に何かを楽しくやることで、自分にも役割があると感じることができ、また次もやりたいと自然と思える。このいい連鎖を地域でも育んでいきたい。

【テーマ②】

水利用や水資源の保全を未来に引き継いでいくために必要なこと、期待や可能性について
(清水氏)

学校林の活動を通し、国有林以外でも約230haの保安林設定をすることができ、洪水被害の経験から、植林後20年ほど経過すれば山林の治水機能が発揮されるということがわかった。植樹祭を開催するなど、地域活動として保全活動を継続したい。

(佐藤氏)

おさるべ川探検隊を始めたきっかけは、「夏になっても誰一人地域の川にいない。素晴らしい川があるのに残念だ。」とか、「小さい頃遊んだの楽しかったよな。最近は子どもたちの姿を見ないな。」という大人たちの会話からスタートした。

地域の自然や歴史文化は、能動的に伝えようと思わなければ伝わらない。活動を通して子どもたちと親しんでいく中で、自然や歴史文化を伝えていきたい。そして、最後はおさるべ川の鮭のように地元に帰ってきてもらいたいと思う。

(山内氏)

今日発表した資料は、北秋田の旧鷹巣土地改良区が合併15周年で作成した記念誌をベースにつくっている。記念誌を見ながら、土地改良区の歴史はそのまま土地改良施設の歴史となるのかなと感じた。先人たちが苦勞して事業を実施してきたものが、現実にもものや写真として残っていることで、皆さんに施設の歴史を伝えられる資料となった。記憶より、写真や音声といった記録として残すことで後世に伝えることができる。

改良区の職員として30年以上経過するが、最初は教わってばかりだった。しかし、いつの間にか教える側へ立場が変わっていた。立場の変化を認識できるようになることで、今日のような会で説明できるようになっていける。

【まとめ】

(平元氏)

皆様の講演の内容を事前に聞かせていただき、描いたイラストがこの図である。北秋田地域は、雄大な森林があり、森林がつくりだす水資源が豊富な地域である。その中で自然に歴史的な仕事生まれ、地域が発展してきている。この図は時系列は関係なく、距離感をつめたコンパクトな図であるが、上流から下流へ水が流れ、水と地域のつながりが一目で認識することができる。可視化することが大切で、豊富な水や広い田んぼという景色も、地域の方々が頑張って利水と治水に取り組んだおかげだったのだと改めて実感できた。また、そのように地域が成り立っているということを人々にも伝えてくれたらうれしく思う。

この図を描いて気づいたのは、北秋田地域は子どもたちがたくさん描けるということだ。そういう地域になれば地域の発展にもつながる。私自身の地域でも目指していきたい。

利水や治水の知恵や歴史についてどう継承し、どう地域振興に結びつけていくのか、何かヒントになるものをひとつでも、今日ご参加の皆様にとって帰っていただければと思う。





会場風景等

